

日本語談話における文の初頭行動・末尾行動の鏡像関係

The Mirror Relation of Sentence Initial and Final Verbal Behavior in Japanese Discourse

熊 磊*

XIONG Lei

(要旨)

文は、話し手が外在的・内在的な因素に基づいて作り出した事柄的な内容と、その事柄をめぐる話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれる、と考えられる。日本語の場合、膠着的な言語であるため、後者は文の末尾に位置していると考えられてきた。しかし、文の初頭にも感動詞類などが来ることから、心情・態度が現れることが観察される。このことから、文の初頭及び末尾には、同じような性質を持った要素が現れる可能性があることが予測される。

文の初頭及び末尾はどうなっているか、互いにどのように関連するかについては、従来のモダリティ論の観点では不明な点が残っている。本稿では、自然談話のデータを利用して、モダリティ論と異なる観点、即ち言語行動の観点から、文の初頭および末尾に現れる性質を分析した。その結果、初頭行動と末尾行動は、聞き手に関わる言語行動と命題に関わる言語行動とによって構成され、両者は鏡像関係にあるという性質が判明した。

【キーワード】 言語行動、言語形式、モダリティ、文、初頭行動、末尾行動

1. はじめに

従来、文をどのように捉えるかということと緊密に関わっている研究に、モダリティ論がある。モダリティ論の観点によって、「文頭」のモダリティ要素は「文末」のモダリティ要素と呼応する性格を持つと指摘されている。具体的には、次の例を見られたい¹。

- (1) 030549D : たぶん、2、3歳でしょう？
030550E : そうだけど、

- (2) 060078J : えとね、ああ、だいたいそういう仕事です。
060079I : ああ
060080J : で、あのう、その後、定時制高校にも行ったんですけどね。(ええ)

モダリティ論の観点によると、(1) の030549Dでは、「たぶん」は、推量を表す「でしょう」と呼応し、(2) の060078Jでは、「だいたい」は、判断を表す「です」と呼応すると考えられている。しかし、(2) の060078J

¹ データの表記については、3.に説明している。

* 山口大学大学院東アジア研究科 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

の「文頭」にくる「えとね」「ああ」と、060080Jの「文頭」にくる「で」「あのう」は、話し手の心情・態度を表わすモダリティ要素と見られるが、それぞれの「文末」のモダリティ要素と呼応するとは言えないだろう。

言い換えれば、「文頭」及び「文末」はどのようなか、互いにどのように関連するか、モダリティ論の観点では解説できないところが残っている。そうすると、新たな観点で観察する必要があると考えられる。また、ここで言及した「文頭」及び「文末」は従来「前置き」及び「文末表現」などと呼ばれているが、それらは具体的に何を指すか、従来の文研究には明確な定義はないようである。

上述した問題に対して、本稿では、言語行動の視点を設定することによって、談話における文を観察することにする。従来の「文頭」及び「文末」といった用語を本稿では「初頭」及び「末尾」と呼び、「初頭行動」及び「末尾行動」などの概念を導入する。これら本稿で用いる概念の定義を次に示す。

- (3) a. 初頭行動：話し手が、話題に関連する命題を産出するために準備する言語行動。
- b. 初頭形式：上述した言語行動を行うために、話し手が用いる言語形式。
- (4) a. 末尾行動：話し手が、命題を産出した後に、態度あるいは心情を表わすために準備する言語行動。
- b. 末尾形式：上述した言語行動を行うために、話し手が用いる言語形式。

2. 先行研究

本節では、モダリティ論、言語行動に分けて、それぞれに関する先行研究を振り返る。

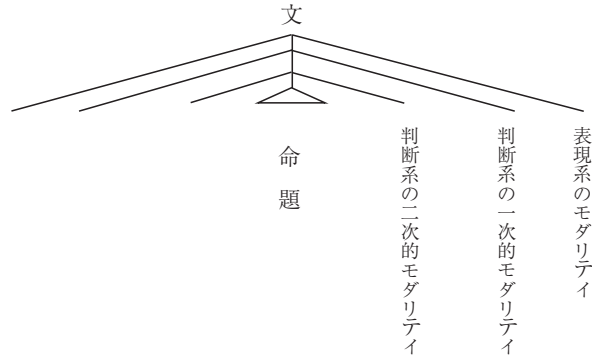
2.1. モダリティ論

モダリティの体系の全体像を描き出す研究としては、仁田義雄 (1991)、益岡隆志 (1991)、森山卓郎・工藤浩 (2000)、日本語記述文法研究会編 (2003) などが挙げられる。これらの研究に、共通する考え方は、下記のようにまとめられる。

- (5) 日本語の文は、客観的に把握される事柄を表す要素 (命題) と、表現者の主観を表す要素 (モダリティ) という二大要素で構成される。「話し手の主観性」を表す形式は、すべてモダリティ形式と考えられる。

とくに、益岡隆志 (1991) はモダリティ論の観点で、文構造及び文構造に対応する意味などについて議論を展開している。この研究は、文を構成するモダリティは「表現形のモダリティ」と「判断系のモダリティ」とに大きく分類でき、さらに下位に6つのカテゴリーに分けられると述べている。その上で、モダリティの構造は「依存関係構造」と「階層関係構造」の2種の構造があることを指摘している。「依存関係構造」は、前節に挙げた (1) のように、「でしょう」は判断を表す「モダリティ核要素」として、「たぶん」は判断の対象に含まれるのではなく、「モダリティ呼応要素」とする、ということである。「階層関係構造」については、「モダリティの諸カテゴリーの間には、文中に顕在化する際には、互いに包み込む・包み込まれるという包含関係が成立する。言い換えれば、カテゴリー間の統合的關係として上位・下位の階層関係が認められる」(益岡隆志1991: 42) と指摘されている。カテゴリー間の全体的な階層関係を図示すれば、次のように引用する。

[図1] モダリティの階層関係



(益岡隆志1991:41図 (51))

また、この研究では、主に終助詞「ね」「よ」、文末の「のだ」「わけだ」など言語形式からモダリティの構造と機能を検証している。

今日ではモダリティ論の観点によって、文の末尾がより詳細に解明されたと考えられるが、文の初頭に関しては、「モダリティ呼応要素」と呼ばれる副詞的なものにしか言及されていない。また、モダリティの「依存関係構造」といっても、本稿の冒頭に述べた問題を解説できない。

2.2. 言語行動について

言語研究の中で、言語行動の研究はかなり盛んである。「言語行動研究とは、社会言語学・語用論・談話分析・会話分析などの、それぞれが固有の歴史をもつ既存の研究分野に対する総称」(渋谷勝己2003:241)と指摘されているように、言語行動はきわめて多くの側面に関わる幅広い分野である

南不二男(1974)は、言語行動を「人間がことばを使ってなんらかのコミュニケーションを行う行動」と述べて、「言語社会」「参加者」「状況」「言語的コミュニケーションの機能」「コミュニケーションの内容(話題)」「媒体」「言語体系」など言語行動の構成要素から談話の仕組みを議論している。また、杉戸

清樹(1992:34)は、言語行動について、次のように述べている。

「言語行動がこうしたさまざまな要素から成り立つという議論をふまえて、これらの要素(ないしその組み合わせ)を観点として実際の言語行動を観察・記述・分析する多様な研究が展開される。言語行動研究の主力というべき領域である。言語行動研究も概括すれば言語研究に属するからには、多くの場合、諸要素のうち言語形式が研究の焦点に選ばれることは言うまでもない。とくに社会言語学的研究においては、個人や言語社会に観察されることばの幅を言語変種(language variety)という術語によって積極的に扱うという、言語形式についての基本的な姿勢が一貫してある。」

一つの文が、どのような言語形式を選ぶかは、話し手の主観で決まり、音声的に実行される。つまり、言語行動と結びついているのは言語形式である。言語形式は言語行動の道具としての存在であるため、2つの言語行動に同じ1つの言語形式が利用されることもある。データを分析する研究者が第三者として、言語形式を観察する際に、話し手の言語行動

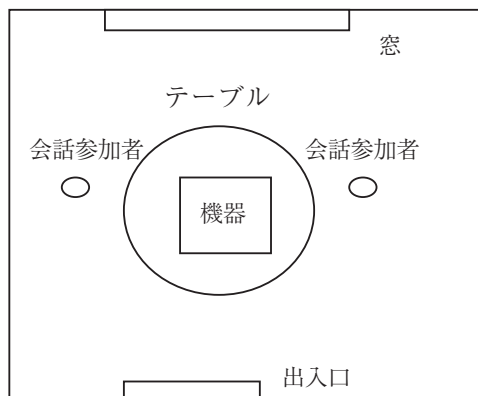
を捉えうると考えられる。そこで、本稿では、文の初頭形式及び末尾形式からどのような初頭行動及び末尾行動が捉えられるか、それらはどのような性質が見られるかということ、を、会話調査のデータから言語行動の視点で試みる。

3. 調査要領

本節では、本稿に用いるデータについて示し、収集方法について述べる。会話調査では、6つの会話を収集した。それらを「データ1」「データ2」…「データ6」と呼ぶ。被調査者の属性を含め、各データの概要を [表1] に示す。

会話調査は、2人ペアの組み合わせで行った。談話の自然さを確保するため、調査者は「話題などは指定しませんから、自由会話の形式で会話してください、30分後（データ1とデータ2は15分）に再び部屋に戻って録音を中止します」とのみ指示を与え、退室した。入室前に、録音・録画機器（KINGJIM ミーティングレコーダーMR360）をセットしておき、全会話の過程を録音・録画した。録音室の配置は [図2] の通りである。

[図2] 調査時の配置



会話調査によって得たデータを示す場合、次のような表記を使用している。

- ? 上昇イントネーション
- 。 下降イントネーション
- 、 短いポーズ
- {笑い} 笑い
- … 音声的に言いよんだように聞こえるもの
- // 改行される発話と発話の間がまったくないこと、同時発話
- () 相手の発話に重なるあいづちや笑い
- # 聞き取れない部分、推測される拍

[表1] データの概要

データ	被調査者	被調査者の関係	録音・録画の時期	録音・録画の時間
データ1	A (20代 女性) B (20代 女性)	同じ大学の学部生 同士	2014年6月16日	約15分
データ2	A (20代 女性) C (20代 男性)	同じ大学の学部生 同士	2014年6月16日	約15分
データ3	D (20代 女性) E (20代 女性)	同じ大学の学部生 同士	2014年12月8日	約30分
データ4	F (20代 女性) G (20代 女性)	同じ大学の学部生 同士	2014年12月8日	約30分
データ5	H (20代 女性) I (40代 女性)	大学院の同じ専攻 の院生同士	2015年3月27日	約30分
データ6	I (40代 女性) J (60代 女性)	初対面	2015年3月27日	約30分

数に応じてつける

< > 聞き取りにくい部分を予測したもの
の
(氏名) 固有名詞 (氏名) が現れる箇所

また、データには、「060129J」のような発話番号を使用している。最初の2桁数字「06」は会話データ全体を示す番号、次の4桁数字は発話の通し番号、「J」は発話者である。括弧【 】は一つの文を指す。その中で、分析対象の言語形式を□で示す。

4. 分析

本節では、収集したデータを利用して、文の初頭形式及び末尾形式にはどのようなものがあるか、どのような言語行動が捉えられるかを分析する。

4.1. 初頭行動の分析

まず、本節では初頭行動について観察していく。

4.1.1. 応答

話し手は、応答の形で、聞き手による行為の要求あるいは情報などのやりとりに対して反応する。次の例が挙げられる。

- (6) 010139A : 【でも、酒飲まないか？】
010140B : 【うん、まあ、でもね、飲み会があるよ。】
- (7) 010078B : 【やっぱり、化粧品の人、あれあれやったら、
【まずいじゃない？】
010079A : 【いや、そうだけど、そうだけど、
【やっぱ、あ、すごいわ。】

- (8) 060002J : 【こちらこそよろしくお願ひ
します。(笑い) ちょっと、
お名前をなにか教えてもら
えますか？】

060003I : 【はい、私は (氏名) と申し
ます。】

話し手は直前の発話あるいは話題に対して、自分が知っていることかどうかを感動詞類を用いて、その言語行動を使い分ける。一般的に、(6)、(8) のように「うん」「はい」など言語形式で肯定の態度を表す。また、(7) のように、「いや」など言語形式で否定の態度を表す。これらの言語形式は初頭に出現する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」と設定する。

4.1.2. あいづち

会話では、聞き手が話し手の話を聞いているとき、反応がないことは稀である。特に、直前の話あるいは話題に関心を持ち、理解したという合図を話し手に伝えるのが一般的である。次の例が挙げられる。

- (9) 020090A : 【あ、高校の時からの友達なん。】
020090C : 【ああ、やっ、ちょっと、国研の1年生だれか//、】
- (10) 060129J : 【やっぱり原発のこともありますし、】
060130I : 【はい、そうですね、
【なんか、このさき、なんか、こう、子ども、(ああ、)】
【なんか、そういうこと考えると (はい)、】

【いいのかあっていう。】

(9)に現れる「ああ、」と(10)に現れる「はい、」はそれぞれの文の初頭に出現し、前に話し手が提供した情報に対する理解を示す。このような感動詞類以外に、「ほんとう」「たしかに」など副詞的なものも用いられる。また、実際の会話に頷きというジェスチャーなどもよく使われるが、本稿では扱わない。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の応答と同様、「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.1.3. 笑い

一般的には、笑いとは、楽しさや嬉しさを表現する感情表出行動の一つである。本稿では、直前の発話あるいは話題に対して笑いを通して、自分のある態度を伝えること、と捉える。次の例が挙げられる。

(11) 030438E: 【勉強がね、怖くなってきたわ。】

030439D: 【【笑い】、そうやね、】
【とりあえず勉強しよう。】

(12) 060080J: 【いやいや、そういうわけでもないです。】

060081I: 【【笑い】、そうですか。】

(11)、(12)に現れる笑いは、それぞれの文の初頭に出た。聞き手の発話の直後に話し手が発した反応である。ここでは、直前に提供された情報に対して理解、あるいは同意などの態度と捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の応答やあいづちと同様に、

「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.1.4. 言いよどみ

話し手は、どう考えたらいいか、どのように言ったらいいか、などと考えている状態を、言いよどみの形で表す。そこには、話し手が何かを言い続ける意志があると思われる。言い換えれば、聞き手による直前の発話あるいは話題を終了するという言語行動が見られる。次の例が挙げられる²。

(13) 060055I: 【【笑い】、そうですか。】

060056J: 【【あのを、ねえ】、ほんとに、私たちって21年だから、
【ちょうど節目の時に生まれ
たんですよ。】

(14) 040061F: 【1週間だし、】

040062G: 【【なんか】、でも、長期合宿もあるでしょう？】

(13)、(14)は、「あのを」、「ねえ」、「なんか、」といった言いよどみの言語形式がそれぞれの文の初頭に出現する。話し手は続けて何を言おうかを考えていると思われ、直前の発話を終了させるといった言語行動を取っていると捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」と設定する。

4.1.5. 意外・驚き

一般的に、話し手は、聞き手の発話の内容を察知し、自分の予想と異なることを察したとき、その驚きの態度を音声にして発する。「あっ」「えっ」など驚愕の意味を含む言語形式が見られる。次の例が挙げられる。

² 命題の中に出現する言いよどみもしばしばデータに見られるが、それは本稿では対象にしない。

- (15) 010099A: 【よう、ようやるね。】
 010100B: 【ようやるやろ。】
 010101A: 【ようやるね、大学生が。】
 010102B: 【四回に分けてやって（笑
 い）、】
 【前二回あ、次、二回鬼やっ
 て、】
 【鬼じゃない、警察か//】
 010103A: 【夜中に?】
 010104B: 【休憩は、はさむよ。】
 010105A: 【やあ（笑い）、えっ、2時間
 ちかくずっとケイドロして
 た?】
 010106B: 【ケイドロしてますね。】
- 060083I: 【うん】
 060084J: 【**だから**、すごくね、活気が
 あって、】
 【いい時代だったなと思いま
 す、ある意味でね。】
- (17) 060078J: 【えとね、あ、だいたいそう
 いう仕事です。】
 060079I: 【ああ】
 060080J: 【**で**、あのう、その後、定時
 制高校にも行ったんですけ
 どね。（ええ）】
- (18) 050178I: 【めっちゃ汚いね。】
 050179H: 【**でも**、机移動するにもで
 きないですよ。】

(15) では、010105Aの文の初頭に出現する「やあ」及び「（笑い）、」は、「休憩ははさむよ。」という内容に対する理解といった言語行動として捉えられる。その直後の「えっ、」によって、話し手は聞き手の発話内容が自分の予想と異なることを示す一方、ここまでのケイドロの内容に関する話題を止めて、別の話題に転換すると考えられる。

以上より、このような言語形式に相当する言語行動は、前節の言いよどみと同様、「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」と設定できる。

4.1.6. 接続表現

文章論などでは、「だから」「でも」などの接続表現は、先行の文あるいは話題とのつながりを示す表現と考えられているが、談話においては、発話あるいは話題を開始する機能を有すると考えられる。次の例が挙げられる。

- (16) 060082J: 【えと、3年制の、だいがっ、
 高校に行けない人たちが、
 (はい) 皆働かないといけ

(16)~(18)はいずれも、「だから」「で」「でも」といった接続詞が文の初頭に出現する。(16)では、「3年制の高校に行けない人は働かないといけない」という話題を聞き手と共有した後、話し手は「だから」を用いて、別の話題を開始する。言い換えれば、それまでの話題を終了させると考えられる。(17)、(18)も同じように捉えられると思う。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、言いよどみや意外・驚きと同様、「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」と設定できる。

4.1.7. 副詞修飾

本節で示す副詞修飾は、従来の研究では「陳述副詞」「文副詞」「モダリティ副詞」と呼ばれている。これは、文末モダリティと呼応する。次の例が挙げられる。

- (19) 060119J: 【51年なら、】

- 【**ほんとに、ある意味で** 満ち足りた時がずっとですからね。】
 060120I : 【そうですね。】
 (20) 010226B : 【ああ、赤いという//】
 010227A : 【**決して** 赤くはなかったろう (ああ)、】
 (21) 050194 I : 【**たぶん、** 1年前もきれいじゃなかったよ、予感する。】
 050195H : 【うん】

(19) では、「ほんとに」、「ある意味で」を用いるのは、話し手が後続命題の確からしさを表している。完全に客観的な情報を保証するのではなく、個人的に考えている曖昧な態度を表明すると思われる。(21) でも、「たぶん」は推量の態度で、命題に対する確からしさが示される。(20) で、「決して」を用いるのは、話し手が命題に対する否定の態度を表明しているものと考えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「後続命題に対する態度を表明する言語行動」と設定する。

4.1.8. 「は」「って」などによる焦点化

日本語研究では、「は」「も」「こそ」など、名詞などの語について、そこに焦点を当てる助詞を「取り立て助詞」と呼ぶ。談話においては、話し手が「～は」「～て」などを用いて、その直前の部分を取り立てて、ほかと区別する。それは、言語行動の一つとして考えられる。次の例が挙げられる。

- (22) 010024B : 【言われちゃった。】
 010025A : 【**私は、** **昨日は、** ああ、今月が誕生日の子がいたから、

- (おう)】
 【あおう、その子の誕生日プレゼントを買いに//】
 (23) 060070J : 【**准看護婦の学校に、** (ええ) それがずっと長いものだからね。(はい)】
 【**外のこと知らないですよ**ね。】
 060071I : 【ああ、】
 060072J : 【**准看って、** あおう、まあ、狭い世界ですよ、ね、】

(22) では、010024Bまでは聞き手Bのことを話題として会話が行われてきた。「私は、」「昨日は、」は文の初頭に出現し、命題の一部として焦点化されると同時に、話題の大まかな方向性も示していると考えられる。これに対して、(23) では、「准看って、」は文の初頭に出現する。ここで、話し手はすでに発話した単語を再び呼び出し、際立たせてその話題を続けることを聞き手に示す。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「命題の一部を焦点化する言語行動」と設定する。

4.1.9. 疑問詞による焦点化

一般的に、疑問文とは話し手にとって未知の情報を聞き手に問うということを表す。言語形式では、「何」「誰」「いくつ」「どんな」など疑問詞を含んだりする。いずれも情報内容が不確定であるという意味で、話し手が聞き手に対して回答を要求する。従って、言語行動と見なす。次の例が挙げられる。

- (24) 060008J : 【さとみさんは、**どんな** ですか?】
 060009I : 【はですね、えと、知識の知、】

- (25) 030442E: 【ああ、いくつで結婚したい？】
いくつまで結婚したい？】
 030443D: 【うん、22で卒業するやんか。】

(24) では、「さとみさんはどんな字」は命題として捉えられるが、前節で述べたように、「さとみさんは、」は後続命題の一部を焦点化する言語行動の言語形式として捉えられる。その直後の疑問詞「どんな」も初頭の位置に出現する。未知情報が取り立てられて、命題の一部として焦点化されると考えられる。(25) では、2つの文は、話し手による繰り返しの発話と見られ、疑問詞「いくつ」が文の初頭の位置に出現し、(24) と同じ、命題の焦点になる。疑問詞または前節の「～は」「～て」などは言語形式としては命題に含まれるが、言語行動としては初頭行動と見なす。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節と同様、「命題の一部を焦点化する言語行動」と設定できる。

4.2. 末尾行動の分析

本節では、末尾行動を観察していく。

4.2.1. 形式名詞述語

日本語研究では、「のだ」「ことだ」は断定、疑問、命令などの用法とされている。本稿では、これらを「形式名詞述語」と呼び、それらを含む言語形式は、話し手が命題に対する態度を強く表すものとする。次の例が挙げられる。

- (26) 060068J: 【あのう、えと、中学卒業してね、(はい、)】
 【すぐ准看の学校に行ったんですよ。】
 060069I: 【ああ、】

- 060070J: 【准看護婦の学校に、(ええ)それが、ずっと長いもんですからね。(はい)】
 【外のこと知らないですよ。】

- (27) 040185F: 【うん、まあね、いい人もいるんだよ、】
 【だが、皆いい人なんだけど。】
 040186E: 【あのさあ、自分と違うでしょう？】

(26) では、話し手が、「准看の学校に行った」ことを強く表明するのは、続いて「准看護婦の学校」の何らかの状況を言うつもりだからである。(27) では、「いい人もいる」ことを強調して、それをめぐって後の話題を展開していく。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定する。

4.2.2. 命題の遂行

日本語研究では、「遂行文」といったタイプが検討されている。それについて、三木悦三(2000)は「或る文を発することそのことが、すなわち、その文の表わしている内容を現実に「行なう」ことになるという」と述べている。ここでは、「言う」「同意する」「約束する」「頼む」「命令する」などの動詞が表われる。次の例を挙げる。

- (28) 060002J: 【こちらこそよろしくお願ひします、(笑い)ちょっと、お名前をなにか教えてもらえますか？】
 060003I: 【はい、私は、(氏名) と申
します。】

(28) では、「申します」が文の末尾に出現する。話し手 I の「私は (氏名)」といった内容は、「申します」という遂行動詞によって表明されている。すなわち、命題に対する態度が見られる。

以上より、このような言語形式に相当する言語行動は、形式名詞述語と同様に、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.3. 話し手自身の感情・思考

本節で議論するのは、「(と) 思う」「(と) 考える」「(と) 感じる」「(の) 気がする」などの思考動詞類である。これらの言語形式を用いる際に、話し手が命題といった内容をめぐって、個人のある判断あるいは個人的な意見を表すと考えられる。次の例が挙げられる。

(29) 060084J : 【だから、すごくね、活気があ
あっていい時代だったな
と**思います**、ある意味でね。】

060085I : 【ああ、そうなんです、
【すごくでも、熱心に勉強
ずっとされたわけですよ
ね。】

(30) 050194I : 【たぶん、1年前もきれいじゃ
なかったよ、**予感する**。】

050195H : 【うん】

(29) では、「活気があっていい時代だった」という内容は、「活気」があるかどうか、「時代」は良いか良くないか、話し手が「と思います」といった言語形式を用いて、個人的な意見を主張する。このように、既出命題に対する個人の主張がみられる。また、(30) は、「1年前もきれいじゃなかった」といった客観的な事実を不確実な態度、「予感する」で表

明する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、形式名詞述語や命題の遂行と同様に、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.4. 命題に対する推量・伝聞など

日本語研究では、「よう」「そうだ」「ようだ」「らしい」などは助動詞類に分類され、推定、推量、伝聞、断定などさまざまな出来事の捉え方を表している。話し手はこれらの言語形式を用いて、命題内容をどのように把握するか、判断するか、という自分の考えを表すのである。次の例が挙げられる。

(31) 060176I : 【ええ、たしかに、その安全
神話今まではあったので、
(あ)】

【事故が起こらないという前
提だから、(はい)】

【低コストで空気も汚さない
と言うん**でしょう**けど、】

061777J : 【空気】

(32) 010074B : 【サンプルとかさあ、「これ
とこれ合わせるといいです
よ」**みたいな**さあ。】

010075A : 【そう、行きとどいてる。】

(31) では、「低コストで空気も汚さないと言う」は確かにこのように言ったかどうか、出来事が真実であるとは言い切れない、という命題に対する態度が捉えられる。「でしょう」の直前にある「ん」も、前節で分析したように末尾形式の一つであり、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」が捉えられる。(32) の「みたいな」は、伝え聞いたことを根拠にして、その命題に対する不確定の

態度を示している。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節と同様、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.5. 述語の終止形

日本語研究では、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞などが活用される場合、他への接続がないとき、または終助詞に接続して文末で言い切る形は終止形と呼ばれている。本稿では、すべての用言の終止形を観察対象にするのではなく、話し手による一つのまとまった話題あるいは内容を打ち切るケースを対象とする。次の例が挙げられる。

(33) 060030J : 【あの年に天下泰平になったから、】

【その泰を取って父がつけたって言って【ました。】】

060031I : 【ああ、とてもいいお名前ですわね。】

(34) 010028B : 【ああ、そうか。】

010029A : 【プレゼントを買いに行ってきた【ました。】】

010030B : 【うん、どこまで、どこ行った？】

(33)、(34) では、「ました」といった終止形がいずれも文の末尾に出現する。(33)では、話し手Jが自分の名前の由来を説明した後、その説明的な話を、「ました」という用言の終止形で完了させる。(34)でも同様である。このデータの文脈をみると、話し手Aは日曜日に買い物に行ったという話題を聞き手Bに伝え、内容的には「(行って) 来た」で終了させる。この終了させる言語行動によって、ここで話題が終わりになるのである。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題を完了する言語行動」と設定する。

4.2.6. 後続内容の判断基準となる接続表現

従来の節と節とを結びつける接続助詞は、文の構成素の一つとして見られるが、話し手の言語行動をどのように捉えるか、観察していく。次の例を挙げてみる。

(35) 060080J : 【で、あのう、その後、定時制高校にも行ったんです【けどね。(ええ)】

【はい、その時も、まあ、ああいう時代です【から、】

【夜間高校もすごく賑やかですわね。】

(36) 010078B : 【やっぱり、化粧品の人、あれあれやっ【たら、】

【まずいじゃない？】

010079A : 【いや、そうだ【けど、】

【そうだ【けど、】

【やっぱりあ、すごいわ。】

(35) では、話し手は、「夜間高校が賑やか」ではないと聞き手が思うだろうと予想する。「けど」から見られる言語行動は、その後「夜間高校もすごく賑やか」を発話する前の逆接条件として準備されるのである。また、「から」から見られる言語行動も、「夜間高校もすごく賑やか」の根拠とする準備である。(36)でも、「化粧品の人、あれあれやる」という命題と「まずい」という命題と繋がる言語行動は「たら」に反映される。次の「けど」は上記と同様に説明できる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題を継続する言語行動」

と設定する。

んです^{ね。}】

060038J : 【そうなんです^{ね、}ほんとに。】

4.2.7. 肯否の態度

聞き手から情報あるいは意見を要求される場合、話し手はそれに応じて単なる情報あるいは意見となる命題を返事するわけではないだろう。その際に命題に伴う言語行動が産出されると考えられる。命題に対する肯定か否定かということは、直前の聞き手の要求に対する態度の表明である。次の例が挙げられる。

(37) 060077I : 【はあ、じゃ、ずっと看護婦されてこられたんですか?】

060078J : 【えとね、あ、だいたいそういう仕事^{です。}】

(38) 010001A : 【えと、(笑い) しゅっ、週末、(うん) 実家に帰ってたんよね。】

010002B : 【実家帰って^{た、}】
【日曜日ね。】

(37) では、聞き手の確認要求に応じて、話し手は「です」という言語形式で肯定の態度を表した。(38) も同様に「た」で肯定の態度が見られる。否定の場合は、一般的に用言の活用による否定の形式になる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、「聞き手に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.8. 話題の共有

本節では、伝統的に終助詞に分類される「か」「の」「よね」「ね」「ぞ」や、上昇イントネーションなどを観察する。次の例が挙げられる。

(39) 060037I : 【相当当時の流行的な名前な

(40) 060048J : 【あ、そしたら、まあ、ずっとお若い時からです^{か?}】

060049I : 【えとですね、いや、昔はサラリーマンをしていた時期もありましたし、】

(39) の060037Iの発話では、「ね。」によって、話し手は既出した命題内容を聞き手に伝えていきながら、聞き手の承認などの返事を待っていることが推測できる。要するに、命題内容を聞き手と共有しているのである。060038Jでは、話し手は、「ね、」を用いて、聞き手に肯定の態度を伝えていく。すなわち、話し手は、聞き手による話題に参加したことを表明している。終助詞といった言語形式のほかに、(40) では、上昇イントネーションも同様に捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、「聞き手に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.9. 聞き手への何らかの行動の求め

本節では、「てもらう」「てくれる」などの動作の方向性を表す補助動詞に言及する。次の例があげられる。

(41) 060002J : 【こちらこそよろしくお願ひします、(笑い) ちょっと、お名前をなにか教えて^{もら}
^{えますか?}】

060003I : 【はい、私は(氏名)と申します。】

(42) 020020C : 【うまいことなんか、やって^{くれる?}】

020021A:【やあ、まあ、そうだよ、大丈夫でしょう。】

(41)では、「お名前をなにか教えてもらえますか」という発話から分かるように、聞き手Iが答えるように話し手が要求している。この要求する言語行動は、「もらえます」という言語形式を用いて実行している。つまり、聞き手に対する態度を表明しているのである。(42)の「くれる」も同様に説明できる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、肯否の態度や話題の共有と同様、「聞き手に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

5. 初頭行動と末尾行動の関係

本節では、文の初頭行動及び末尾行動の種類とそれぞれの言語形式をまとめる。[表2]のようになる。

[表2]に示すように、まず、文の初頭行動は、4つの言語行動に下位分類でき、9種類の言語形式が見られる。末尾行動も、4つの言語行動に分類でき、9種類の言語形式が見られる。さらに、初頭行動と末尾行動の間に類似したものが見られることから、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察してみる。

まず、次のようなデータを見てみる。初頭形式は一重下線で、末尾形式は二重下線で示す。

[表2] 言語行動と言語形式

言語行動		言語形式	
初頭行動	①直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動	応答 (「はい、」「うん、」「いや、)」	初頭形式
		あいづち (「ああ、」「はい、)」	
		笑い	
		言いよどみ (「あのう、」「ねえ、」「なんか、)」	
初頭行動	②直前の発話あるいは話題を終了する言語行動	意外・驚き (「えっ、)」	初頭形式
		接続表現 (「でも、」「だから、」「で、)」	
		副詞修飾 (「たぶん、」「決して」「ほんとに、」「ある意味で」)	
		「は」「って」などによる焦点化 (「私は、」「昨日は、」「准看って、)」	
初頭行動	③後続命題に対する態度を表明する言語行動	疑問詞による焦点化 (「どんな」「いくつ」)	初頭形式
		形式名詞述語 (「んです」「んだ」)	
		命題の遂行 (「と申します」)	
		話し手自身の感情・思考 (「と思います」「予感する」)	
末尾行動	④命題の一部を焦点化する言語行動	命題に対する推量・伝聞など (「でしょう」「みたいなの」)	末尾形式
		述語の終止形 (「ました」)	
		後続内容の判断基準となる接続表現 (「けど、」「から、」「たら、)」	
		肯否の態度 (「た、」「です。)」	
末尾行動	①既出命題に対する態度を表明する言語行動	話題の共有 (「ね、」「か?」)	末尾形式
		聞き手への何らかの行動の求め (「もらえます」「くれる」)	
		既出命題を完了する言語行動	
		既出命題を継続する言語行動	
末尾行動	④聞き手に対する態度を表明する言語行動	聞き手への何らかの行動の求め (「もらえます」「くれる」)	末尾形式
		既出命題を完了する言語行動	
		既出命題を継続する言語行動	
		既出命題に対する態度を表明する言語行動	

- (43) 010139A : 【でも、酒飲まないか?】
010140B : 【うん、まあ、でもね、飲み
会があるよ。】

(43) の010139Aでは、初頭に来る「でも、」は「接続表現」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」である。末尾に来る「か」や上昇イントネーションは「話題の共有」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「聞き手に対する態度を表明する言語行動」である。

010140Bでは、初頭に来る「うん、」「まあ、」は「応答」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」である。その直後に来る「でもね、」は「接続表現」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」である。末尾に来る「よ。」は「話題の共有」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「聞き手に対する態度を表明する言語行動」である。

以上、いずれの発話においても、初頭行動の「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」と「直前の発話あるいは話題を終了する言語活動」は聞き手に対する言語行動と考えられる。このことから、初頭行動と末尾行動には共通点があるということが分かる。

- (44) 060056J : 【あのう、ねえ、ほんとに、
私たちって21年だから、】
【ちょうど節目の時に生まれ
たんですよね。】
060057I : 【ええ、そうそうね。】

(44) の060056Jの最初の文では、初頭に来

る「あのう、」「ねえ、」は「言いよどみ」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」である。その直後に来る「ほんとに」は「副詞修飾」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「後続命題に対する態度を表明する言語行動」である。続いて来る「私たちって」は「は」「って」などによる焦点化」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「命題の一部を焦点化する言語行動」である。末尾に来る「から、」は「後続内容の判断基準となる接続表現」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題を継続する言語行動」である。

ここで見られる初頭行動は、聞き手に関わる言語行動とその直後の命題に関わる言語行動である。末尾行動は命題に関わる言語行動である。命題に関わる言語行動が、初頭行動にも末尾行動にも共通して現れていることがわかる。

060056Jの2番目の文では、初頭に来る「ちょうど」は「副詞修飾」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「後続命題に対する態度を表明する言語行動」である。末尾に来る「んです」は「形式名詞述語」といった初頭形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題に対する態度を表明する言語行動」である。その直後に来る「よね。」は「話題の共有」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「聞き手に対する態度を表明する言語行動」である。

ここで見られる初頭行動は命題に関わる言語行動であり、末尾行動は命題に関わる言語行動とその直後の聞き手に関わる言語行動である。ここでも、命題に関わる言語行動が、初頭行動にも末尾行動にも現れている。

060057Iでは、初頭に来る「ええ、」は「応答」といった初頭形式で、それに相当する初

頭行動は「直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」である。末尾に来る「ね。」は「話題の共有」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「聞き手に対する態度を表明する言語行動」である。

ここでは、(43)と同様、初頭行動と末尾行動に共通して、聞き手に関わる言語行動が現れていることが分かる。

さらに、次のデータを見てみよう。

(45) 040061F: 【1週間だし、】

040062G: 【なんか、でも、長期合宿もある でしょう?】

(45)の040061Fでは、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。末尾に来る「し」は、「後続内容の判断基準となる接続表現」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題を継続する言語行動」である。

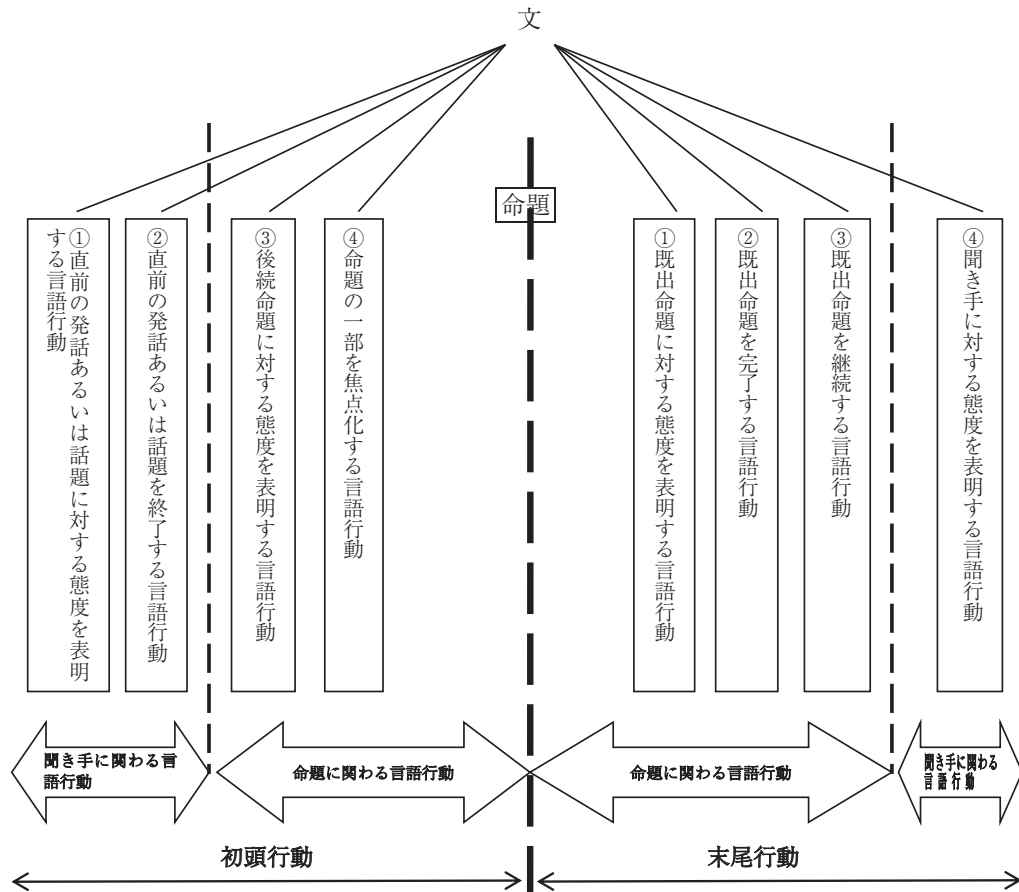
040062Gでは、初頭に来る「なんか」は「言いよどみ」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」である。その直後に来る「でも、」は「接続表現」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動も「直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」である。続いて来る「長期合宿も」は「は」「って」など

による焦点化」といった初頭形式で、それに相当する初頭行動は「命題の一部を焦点化する言語行動」である。一方、末尾に来る「でしょう」は「命題に対する推量・伝聞など」といった初頭形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題に対する態度を表明する言語行動」である。その直後の上昇イントネーションは「話題の共有」といった末尾形式で、それに相当する末尾行動は「聞き手に対する態度を表明する言語行動」である。

ここで、捉えられる初頭行動は、聞き手に関わる言語行動とその直後の命題に関わる言語行動である。末尾行動は同様に、命題に関わる言語行動とその直後の聞き手に関わる言語行動である。初頭行動と末尾行動に共通の言語行動が現れていることが分かる。

以上、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察した。基本的に、文の初頭行動が行われる際に、末尾行動も行われる。いずれも聞き手に関わる言語行動と命題に関わる言語行動を含む、と考えられる。また、初頭行動には、聞き手に関わる言語行動が命題に関わる言語行動の前に出現する。一方、末尾行動には、聞き手に関わる言語行動が命題に関わる言語行動の後ろに出現する。これらの関係を図示すれば、下のようになる。

【図3】 初頭行動と末尾行動との鏡像関係



【図3】から分かるように、まず初頭行動には、「①直前の発話あるいは話題に対する態度を表明する言語行動」「②直前の発話あるいは話題を終了する言語行動」「③後続命題に対する態度を表明する言語行動」「④命題の一部を焦点化する言語行動」が現れる。このうち、①、②は聞き手に関わる言語行動である。また、③、④は命題に関わる言語行動である。一方、末尾行動には、「①既出命題に対する態度を表明する言語行動」「②既出命題を完了する言語行動」「③既出命題を継続する言語行動」「④聞き手に対する態度を表明する言語行動」が現れる。このうち、①、②、③は命題に関わる言語行動であり、④は

聞き手に関わる言語行動である。

【図2】に示したのは、文が産出される時、初頭行動及び末尾行動の下位言語行動はどのように構成されるかということである。ここでは、文の命題を中心として、命題から相対的に外側には聞き手に関わる言語行動が、相対的に内側には命題に関わる言語行動がそれぞれ位置している。つまり、命題を中心として、初頭行動と末尾行動とは、鏡像関係にあるといえるだろう。

6. おわりに

本稿では、文という言語単位を対象として、

共通する性質を持つ言語行動が文の初頭および末尾のいずれにも現れることを分析した。

まず、文の初頭形式及び末尾形式に現れるものを記述して、それらの言語形式に相当する言語行動を設定した。即ち、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察してみた。その結果、初頭行動と末尾行動とは同じ性質をもち、命題を中心として鏡像関係にあることが判明した。従来のモダリティ論では、おもに末尾の言語形式・機能にしか焦点が当たっておらず、初頭要素は末尾要素と依存関係があるものとしてしか捉えられていなかった。しかし、本稿では、言語行動に焦点を当てることによって、文の初頭行動と末尾行動との間に共通する性質があるということだけでなく、命題を中心とした鏡像関係にあることまでも発見することができた。このことは、文研究だけでなく、言語行動研究にとっても意義があると言える。

ただ、未解決の問題も残っている。本稿では、言語行動の鏡像関係を、命題に関わ

るか聞き手に関わるかといった比較的マクロな観点から提示しただけである。それらを下位分類したミクロな観点からの言語行動どうしの横の関係、即ち言語行動の統合関係 (syntagmatic relation) もあるはずである。この関係も含めた鏡像関係を仮定することが必要であろう。

また、文という言語単位を超えたレベルでの鏡像関係も想定される。本稿では文を対象としているが、これよりも上位レベルの言語単位である「発話単位」「話段」を仮定することによって、これらのレベルにも初頭行動と末尾行動が見出せること、そして両者に鏡像関係のあることが予測できる。このことは言語単位レベルを超えて同様の関係性が保持されるということの意味しているが、これは音韻論や統語論で提唱されている「継承 (percolation)」という概念を彷彿とさせるものである。文における言語行動の鏡像関係は、上位のレベルへと継承されている可能性があるかと推測される。言語単位レベルどうしの相互関係の解明も、今後の課題である。

【参考文献】

井島正博 (2012) 「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』第8号 pp.95-145.
 伊豆原英子 (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻2号 pp.1-15.
 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2) 研究成果報告書 (課題番号15320064)
 加藤重広 (2001) 「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』第35巻 pp.31-48.
 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店

久野暲 (1983) 『新日本文法の研究』大修館書店
 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構：心的操作標識「ええ」と「あの(ー)」」『言語研究』第108号 pp.74-93.
 渋谷勝己 (2003) 「言語行動の研究史」北原保雄監修・荻野綱男編『朝倉日本語講座9 言語行動』朝倉書店 pp.241-262.
 白川博之 (1996) 「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号 pp.9-17.
 杉戸清樹 (1992) 「言語行動」真田信治ほか『社会言語学』おうふう pp.29-47.
 杉戸清樹 (2006) 「「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版 pp.1-10.
 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』くろしお出版 pp.257-279.

- 友定賢治 (2005) 「感動詞への方言学的アプローチ—「立ち上げ詞」の提唱—」『月刊言語』34-11 大修館書店 pp.56-63.
- 友定賢治編 (2015) 『感動詞の言語学』ひつじ書房
- 中村明ほか編 (2011) 『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
- 中島平三・瀬田幸人監訳 (2009) 『オックスフォード言語学辞典』朝倉書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 仁田義雄ほか (2000) 『文の骨格 日本語の文法1』岩波書店
- 仁田義雄・宮島達夫編 (1995) 『日本語類義表現の文法 複文・連文編』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4第8部 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- J.V.ネウストプニー (1979) 「言語行動のモデル」南不二男編『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店 pp.33-68.
- J.V.ネウストプニー (2003) 「日本の言語行動の過去と未来」北原保雄監修・荻野綱男編『朝倉日本語講座9 言語行動』朝倉書店 pp.1-28.
- 野田尚史 (2002) 『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 林四郎 (1960/2013) 『文の姿勢の研究』ひつじ書房
- 林四郎 (1979) 「言語行動の概観」南不二男編『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店 pp.69-100.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『複文 (新日本語文法選書 (2))』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1979) 「言語行動研究の問題点」南不二男編『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店 pp.5-32.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 南不二男 (1997) 『現代日本語研究』三省堂
- 三木悦三 (2000) 「サールと「遂行性」」『熊本県立大学文学部紀要 第7巻第1号』pp.33-57.
- 泉子・K・メイナード (1993) 『日英語対照研究シリーズ2 会話分析』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード (1993) 『談話分析の可能性: 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード (2004) 『談話言語学: 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- 森山卓郎・工藤浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店